



20 世紀前半の神戸の定住西洋人 : 史料の活用と研究の展開 (〈特集〉国際ワークショップ「日本在住外国人コミュニティの歴史の発見 : 研究・アーカイブス・特別コレクション」)

田村, 恵子

(Citation)

海港都市研究, 5:29-39

(Issue Date)

2010-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81002109>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002109>



20 世紀前半の神戸の定住西洋人

——史料の活用と研究の展開——

田村 恵子

(TAMURA Keiko)

ハロルド・S・ウィリアムズ・コレクションと神戸の定住西洋人

筆者が20世紀の前半に神戸に長く住んだ西洋人たちと時空を越えた出会いをしたのは、神戸から遠く離れたオーストラリアの首都キャンベラにあるオーストラリア国立図書館だった。その初代館長の名前をとったハロルド・ホワイト・フェローシップを2002年に授与され、図書館所蔵のハロルド・S・ウィリアムズ・コレクションを使って5ヶ月間研究をする機会が与えられた。その後2005年に、国際交流基金の助成で神戸大学国際文化学部客員研究員として、神戸で6ヶ月間の調査をし、その成果として、*Forever Foreign: Expatriate Lives in Historical Kobe* (永久の異国人たち：神戸在住外国人たちの歴史的研究) という本を2007年に出版した [Tamura 2007]。

この本では、神戸に住みそこに骨を埋めた4人の外国人たちの人生について記述したが、その一人は、コレクションの寄贈者であるハロルド・S・ウィリアムズだった。ウィリアムズは、オーストラリアのメルボルンで1898年に生まれ1987年に神戸で没したが、その長い生涯のうちの60年間余りを神戸で暮らした。初来日は1919年で、メルボルン大学医学部在籍中の夏期休暇を利用して日本語学習をするためだった。「いつか日本は世界で問題を起こすに違いない」と考えていた父の勧めで、日本人家庭教師について勉強を始めていた日本語だが、語学を磨いた後は帰国する予定だった。しかし運命のいたずらか、まさかと思って応募したスコットランド系の貿易商フィンドレー・リチャードソン社に採用され、その神戸支社に赴任することになった。結局、彼はメルボルン大学での学業に戻ることはなかった¹。

ウィリアムズは1930年代に神戸支社の支配人となり、1935年にニュージーランド出身のガートルード(愛称ジーン)と結婚し、神戸の英国系コミュニティーの一員として仕事と生活の基盤を築いた。この時代のオーストラリア人は、一般的に英国への憧憬と一体

1 ハロルド・S・ウィリアムズの日本とのかかわりについては拙論“Harold S. Williams and his Japan”及び*Forever Foreign*内第5章“Chronicler of the Past: Harold S. Williams”を参照のこと。

感を持っていたが、ウィリアムズも例外ではなく、神戸でも英国系住人と強い交際関係を保っていた。神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブや神戸クラブなどの西洋人対象の社交クラブや英国国教会を通して、彼は英国人コミュニティの中で活発に活動した。

日本への興味は、ウィリアムズの日本在住期間が長くなるにつれてしだいに学究的方向に発展し、日本の歴史や文化に関する蔵書コレクションを充実していった。しかし1941年8月に、戦争の危険が迫り日本国内で英米系の資産が凍結されて貿易業を営むことが困難になり、彼は蔵書を残したままあわただしく日本を離れた。オーストラリアへ帰国後、オーストラリア陸軍に志願し、情報将校として戦争中は対日戦略に関わった。1945年9月に彼は英連邦占領軍の一員として日本に戻ってきたが、知人に預けていった蔵書はすっかり消え去ってしまっていた。

戦後の4年間は占領軍の軍人として東京で過ごしたウィリアムズは、1949年に神戸に戻り貿易業を再開した。戦後のビジネスは安定していたが、彼の関心の中心は歴史研究だった。ウィリアムズは、日本史や日本文化を研究をする学者は多い一方、日本に住んだ西洋人に関しての研究はほとんどないことに気づいていた。この分野の書籍、文書、新聞記事の切り抜きを収集するだけでなく、多くの研究者やインフォーマントとの手紙のやり取りで情報を集め、その研究成果は日本国内の英字新聞に連載記事として掲載した²。

ウィリアムズの研究と執筆活動は1950年代に始まり、25年間ほど活発に続き、その間に多くの記事や著書が出版された [Williams 1958, 1959, 1963, 1975]。世界中に散らばった元日本在住者や研究者たちとの手紙のやり取りや、日本国内はもとより世界を旅して収集した資料は、すでに日本内外の研究者の間で高い評価を受けていた。その資料の行く末について考え始めたのは、彼が70歳になった頃だったが、当時の日本で資料保存の実態が不十分だったのをよく知りまたその体制を信頼していなかったウィリアムズは、自身のコレクションをオーストラリア国立図書館に寄贈することに決めた³。

ウィリアムズは、オーストラリアへの寄贈を決定した後も、最終的にすべて引き渡すまで長年コレクションの整理を精力的に行った。コレクション資料は、神戸からキャンベラ

2 ウィリアムズは毎日デイリーニュースに "The Shades of the Past" というシリーズ名で、1953年から1976年まで総数66回にわたって記事を随時掲載した。

3 1960年代からアジアに関する資料を重点的に収集していたオーストラリア国立図書館は、所用で訪日したハロルド・ホワイト館長が神戸のウィリアムズ宅を1969年に訪問して資料の下見をしている。ウィリアムズが寄贈を決定した後も、1971年にケネス・マイヤーが理事会を代表として、コレクションの内容を再確認するためにウィリアムズ宅を訪れている [Edbury 2007: 401-2]。

へ数回に分けられて送られたが、その間に彼は自分で資料を分類し、索引を作り、さらに他所参照索引も制作した。資料が将来十分活用されるためには、しっかりとした目録の作成が不可欠であると調査経験上わかっていたからである。いくら収集資料の内容が優れていても、目録なしでは資料は古紙の山と同じになってしまう実態をウィリアムズは知っていた。目録を作成したのが、収集者本人だったことは非常に幸運だった。彼の分類に基づき、オーストラリア国立図書館は、ウィリアムズ・コレクションの手稿史料目録を 2000 年に出版した [Collins 2000]。なおこの目録の内容はインターネットで参照でき検索も可能である⁴。

しかし、ウィリアムズのコレクションへの非常に強い愛着は、利用者にとって問題となった。自分の研究が出典を明らかにしないで盗用されるのを恐れたウィリアムズは、閲覧許可をウィリアムズ本人、そして彼の死後はウィリアムズ夫人から得る必要があるという条件をつけたのである。このため、ウィリアムズ・コレクションは非常に利用が難しい幻のコレクションという定評が日本で定着してしまった。しかし、夫妻の死後の 2001 年に、子息のピーター・ウィリアムズによってコレクションが全面的に開放され、その後手稿史料の多くがアダム・マッシュー出版の手によってマイクロフィルム化されて市販されている⁵。

ウィリアムズ・コレクションの可能性と限界

ウィリアムズ・コレクションには、書籍や手稿史料のほか古地図やエッチングなども含まれている。書籍はほとんどが英語で約 3000 冊あり、内容は会社や個人名簿であるビジネス・ディレクトリー、旅行記や歴史など幅広い分野にわたっている。手稿史料は国立図書館内マニュスクリプト・コレクション部門の所蔵で（コレクション番号：6681）、量として 16.4 メートル分、内容的には 80 箱と 60 フォリオである。

手稿史料コレクションは、テーマ別に 13 のシリーズに分類され、各シリーズは項目別にフォルダーに収められている。特にシリーズ 3 は、日本で重要な役割を果たした西洋人名や欧米系会社名の索引となっており、この索引を使ってコレクション内の他の関連資料を探することができる。さらに日本に関連のあるオーストラリア人名の索引も含まれて

4 目録のウェブアドレスは <http://www.nla.gov.au/ms/findaids/6681.html>

5 *Japan through Western Eyes: Manuscript Records of Traders, Travellers, Missionaries and Diplomats, Part 7 and 8, The Harold S. Williams Collection*, microfilms, Adam Matthew Publications.

いる。この索引をインターネット上で閲覧し、多くの利用者が資料請求をするため、オーストラリア国外からの利用請求がもっとも多いのがウィリアムズ・コレクションである。

私の研究対象は 20 世紀前半の神戸の定住外国人である。居留地制度が 1899 年に実質的に終了した後、西洋人は日本国内の経済活動に積極的に進出し始め、同時に日本人の貿易活動への参入が活発化した時期であるが、先行研究は非常に少ない。さらに、この時期はウィリアムズが神戸に到着しビジネス活動を開始した時期と重なるため、コレクション内には、彼と同時代の神戸に生きた英国系定住者の資料も収められている。そのうち、ハリー・グリフィス（1882 年生－1944 年没）とアーネスト・ジェームス（1889 年生－1952 年没）は、生前にウィリアムズと深い親交があり、さらに二人の死後、遺産の処理が彼に任せられたため資料が比較的豊富で、筆者の研究の対象とした [Tamura 2007:15-27, 45-60]。

コレクション内の写真アルバムも非常に参考になった。歴史的な写真も多くあったが、筆者が一番活用したのは、2002 年に遺族が図書館に寄贈したウィリアムズの個人所蔵アルバムで、彼の神戸到着後、西洋人コミュニティの中で活動する記録として研究の発展の糸口を作ってくれた。

反面、ウィリアムズ・コレクションには限界もある。彼の交際範囲や研究対象が、英国及び英国系の人々中心だったため、たとえばフランス人、オランダ人、ドイツ人などの非英国系西洋人定住者に関しての資料はあまり集められていない。さらに、神戸に居住していた中国、インド、朝鮮の人々に関しては、まったくといっていいほど資料はない。西洋人と日本人との関係についてもカバーされておらず、女性に関して資料は数少ない。キリスト教伝道活動では女性宣教師たちが活躍したが、ウィリアムズの関心はそこにはなかった。

メリー・河谷・キルビーに関する調査

拙書 *Forever Foreign* では、第 3 章にメリー・河谷・キルビーに関して ”Woman of two worlds” と題して書いていたが、コレクション内に資料が少なかったため当初の調査は困難だった。しかし、私の調査方法を以下に紹介することで、具体例を通してコレクションの可能性と限界を検討し、さらにはコレクション外での調査の展開方法の参考となれば幸いである。

日本人の母と英国人の父の間に 1882 年に生まれ 1955 年に神戸で亡くなったメリー・

河谷・キルビーに私が興味を持ったきっかけは、キルビー一家の家族の写真の中に、1891年と1901年に撮影された彼女の写真を2枚見つけたことだった(写真1、2参照)⁶。一枚目の写真は、メリーが8歳のときに神戸元町の市田写真店で撮影したもので、まだ幼い彼女は幅広い縫い上げがある着物姿で大人の女性に手をひかされている。2枚目は、18歳のときに英国のエクセターで撮影されたもので、すっかり成長したメリーがエレガントなレースのブラウス姿で写っている。この2枚の写真以外、コレクションの中に彼女が実際に存在したという証拠はなかった。



写真1 メリー(8歳)、神戸にて。



写真2 メリー(18歳)、英国エクセターにて。

【出典はともに、National Library of Australia, Manuscript Collection (MS6681/1/76)】

ウィリアムズは、「キルビー・ホール」と名付けられたフリーメーソンの集会場の由来に関連して、メリーの大叔父にあたるエドワード・キルビーと彼女の父親のアルフレッド・キルビーについて書いている [Williams 1979]。エドワード・キルビーは英国人起業家で、中国経由で1865年に横浜に到着した後、神戸の小野浜で造船所を起し、近代的造船技術を日本に導入した。この造船所はその後日本海軍に買収され、海軍工廠として発展した。 [千田 2004] また神戸で最初の輸入品雑貨店を、1868年から70年代にかけて経営した

6 National Library of Australia, Manuscript Collection (6681/1/76).

のも彼だった。しかし、エドワードは事業の行き詰まりを苦にして、1883年に横浜でピストル自殺を遂げている。

アルフレッド・キルビーはエドワード・キルビーの甥で、叔父の造船事業を手伝うためにそれまで働いていたインドから日本にやってきた。到着後まもなく日本人女性河谷アサと知り合い、二人の娘が生まれた。長女がメリー（日本名、うめ）で、次女のエミー（日本名、ゑみ）は幼くして盲目になった。エドワードの死後もアルフレッドは神戸に留まり、叔父の残した資産を管理するかたわら、船舶調査の仕事をしていた。彼はフリーメーソンの熱心な会員で、19世紀の末期には神戸ライジングサン・ロッジのマスターの役職にもついている。メリーはアルフレッドの娘としてウィリアムズの記事に名前が現れるものの、あくまでも年老いた父親と盲目の妹の世話をしたという言及がされただけだった。2005年に、ウィリアムズ・コレクション内で見つけられる資料のみを使って、私はメリー・キルビーに関する記事をオーストラリア国立図書館の定期行物に寄稿した。[Tamura 2005] しかし、神戸での現地調査の際に、さらに資料発掘をしたいと考えていた。

神戸でまず最初に訪問したのは、一家の名前がつけられている「キルビー・ホール」だった。この建物は、フリーメーソンのロッジ（集会所）として、メリーとエミーの姉妹の遺産で1972年に北野町の神戸外国クラブの敷地内に建てられたものであり、現在でも神戸のフリーメーソンの会員たちに利用されている。ここで関係者に聞き取りを試みたが、メリー・キルビーという名前を知る人はおらず収穫はなかった。2度目の訪問の際には、ホール建築の計画時期である1960年代の会議議事録を見つけることができたが、そこにもメリーの名前はみつからなかった。たとえ写真が2枚残っていても、はたしてメリー・キルビーは実際に存在したのかどうかという確信が持てなくなってしまった。

しかし、意外なところから調査の進展のきっかけが見つかった。2005年4月に神戸市立博物館で開かれた神戸外国人居留地研究会の例会で、ハロルド・ウィリアムズについて発表する機会が与えられ、その際にメリー・キルビーについての前述の英文記事を会場で配布した。その講演後、一人の婦人がメリー・キルビーを知っていたと話してくれたのだった。彼女はナンポリア・美知子さんといい、現在はインド人の夫とともに神戸に住んでいるが、終戦の前後は、北野町にあったメリーの家の母屋の裏側に建っていた使用人用家屋に下宿していたという。彼女は戦前の北野町で育ち、1945年6月の神戸大空襲で焼け出された後、メリーの母屋の裏の二階の一部屋を友人と借りたのだった。ようやく、メリーを直接知っている人を捜し当てることができ、彼女の実在が確認できた。

神戸での調査中に、洋画家の小松益喜（1904年生－2002年没）が外国人が多く住ん

でいた北野の異人館の町並みを戦前から戦後にかけて好んで描いたことを知った。この異人館街は空襲や戦後の開発などでしだいに消えていったものの、1970年代前半まで北野町には残っていた。現在残っている数軒の異人館は神戸の観光資源として活用されている。1930年代から異人館を描いていた小松益喜の画集を繰っているときに、作品に「桃色の家」と題された絵があり、それに寄せて彼が次のような短い文を書いているのに気がついた。

この家には哀しい思い出がある。ここに住んでいた両親がぽっくりと死んで、あとには盲目の妹と姉の二人だけが残されたのだった。私がこの家の正面の道路でこの絵を描いていると、姉さんが妹を車イスに乗せて連れて来て、妹に説明している様子が痛々しかった。[小松 1979: 頁表示なし]

小松が書いている内容とキルビー家の両親の死の時期にはずれがある。しかし、彼がこの家に住んでいた姉と盲目の妹を見かけたのは確かで、それはキルビー姉妹にちがいないという予感がした。幸いこの画集には、北野町の地図が含まれ、それに小松が描いた家々の場所が記されており、この「桃色の家」がどこにあったかがわかった。

小松が描いた絵をナンボリアさんに見せ、場所と、絵に描かれた家が姉妹が住んでいた母屋であることを確認した。家の場所が確認できたので住所がわかり、私は神戸地方法務局に出向いた。その地所の土地登記台帳の閲覧請求をするためである。受け取った書類には、この「桃色の家」が建っていた土地の所有権の移り変わりが記録されていた。台帳によるとこの土地は1894年にメリーの母親である河谷アサの所有にになり、1905年に母親が死亡した後相続として、1906年に所有権がメリーに移っていると記載されていた。登記がアルフレッド・キルビーではなく河谷アサの名前でされていたのは、1926年に外国人土地法が施行されるまで外国人による土地の所有が認められていなかったためであろう [洲脇 1998: 1]。土地所有権と国籍の問題は神戸の定住外国人にとっては重要な問題だが、本稿では残念ながら詳しく触れることができない⁷。

メリー・キルビーの調査のきっかけになった肖像写真のうちの1枚は、1901年にイギリスの南西部にある町、エクセターで撮影されており、この時期にメリーがここに滞在していた証拠となっている。さらに、彼女が神戸での幼少時代から親しくしていたエミリー・

7 メリー・キルビーの国籍問題に関しては拙書 (2007: 38-9) で言及した。

キルビー（エドワード・キルビーの娘で、メリーとほぼ同年齢）が同じ写真館で撮影した肖像写真がコレクションに収められており、この時期にメリーはイギリスにいる親戚を訪問していたのであろうと推察できる。しかし、訪問時期、滞在期間、また寄宿先などはまったくわからなかった。ここで気がついたのが、10年に一度実施される英国の国勢調査のデータが、1841年から1901年の分までインターネット上で公開され、名前などで検索できることだった⁸。1901年は彼女が写真館で肖像写真を撮影した年であり、かつ国勢調査が実施された年である。なんとか、調査の当日にメリーがイギリスにいるように祈りながら、彼女の名前と出生地である日本をデータベースに入力し、検索ボタンを押した。そして、メリー・キルビーの名前が現れたときの驚きと興奮は今でも新鮮である。国勢調査は世帯ごとに記入されており、それによるとメリーは、エクセターに住む彼女の祖母（父アルフレッドの両親）と同居して、国籍は英国臣民と記されていた。

研究者が情報を求めていろいろな史料を探し検討するのは当然である。ある一つの資料からの情報は、わずかなものかもしれないが、それが手がかりとなり、次の情報が得られる。この作業は根気が必要であるが、同時に研究者冥利に尽きるような満足感を得ることができる仕事でもある。以上あげた例では、ともすれば資料が分散し断片的にしか残っていない外国人居住者の歴史研究のために、歴史的資料だけではなく、聞き取り、絵画、インターネットを有効的に利用して肉付けをすることができる可能性を具体例として提示した。

日本における外国人コミュニティの歴史研究の将来の方向

筆者はこれまで、日本に長く住んだ西洋人たちの経験と、彼らのホスト・コミュニティである日本との関わり方についての研究を続けてきた。また、日本の社会や政治の変化が、定住西洋人たちの生活にどのような影響を与えてきたかについても調査してきた。太平洋戦争は彼らに非常に大きな衝撃を与え、多くの人生がまったく変わってしまった。財産を失ったものも、強制収容中に生命を失ったものもいる。

過去30年間ほど、神戸の定住西洋人コミュニティは縮小の傾向にある。外国人経営の商館が、輸出入関連の貿易で活躍していた時期はすっかり遠いものとなり、定住者の子供たちも、神戸にある国際校の高校を卒業し、海外の大学へ進学し、ほとんど神戸に戻っ

8 英国の国勢調査データは "Ancestry.co.uk" サイト上で公開されている。 <http://www.ancestry.co.uk>

てこない。1995 年の阪神大震災によって大きな被害を受けた神戸は、その後 10 年間あまり続いた経済不況でさらに大きな打撃をうけた。現在、神戸に住む外国人たちの大多数は、会社から派遣された 2、3 年間の短期滞在者で、彼らにはコミュニティー意識は薄く、神戸外国クラブや神戸レガッタ・アンド・アスレティック・クラブなどの外国人社交クラブは、新規会員集めに苦勞している。西洋人コミュニティーは、過去を知る世代が亡くなり、自らの歴史を残そうとする人も非常に少ない。

今後の研究の展開としては、日本人と西洋人コミュニティー相互の関連を広い視野からとらえ、特に外国人コミュニティー同士の関係をさぐる方向が考えられる。その意味でも、2008 年 12 月にキャンベラで開かれたワークショップは画期的な企画で、外国人コミュニティーの歴史研究に従事する研究者やアーキビストが一同に集まり、意見や視点の交換をする機会を得ることができた。

ではどのように、今後研究を進めていけばいいのだろうか。ここで、杉原達による大阪の在日韓国人コミュニティー研究は刺激的である。杉原は著書『越境する民』の中で、「越境する文化交流・文化接触の社会史」という示唆に富む視点を提示し、ある「地域」あるいは「場」において、日本人と「外国人」がどのように出会い、関係しあうかについて考察する必要があると提言している [杉原 1998: 211-12]。このように、ある特定の外国人コミュニティーの歴史を時間軸でとらえ、集中的に精査していく作業だけではなく、ある場所と時代に注目し、そのコミュニティー内の関係や日本人とそのコミュニティーとのつながりを検討しようという提言である。そしてさらには、外国人コミュニティー同士の相互関係の研究にも発展できると私は考える。この作業は一人の研究者が単独にするにはあまりにも守備範囲が広がりすぎる研究である。しかし、それぞれの外国人コミュニティーの研究者が連携し、研究成果を互いに報告し検討することで、場所と時を共有する外国人コミュニティーに現れる差異と類似が明らかになるであろう。さらには、日本において外国人として暮らすこととは、いったい何を意味するのかというより理論的な方向も探ることができるのではないだろうか。

近年、大阪・阪神間・神戸地域において 1920 年代後半から 1930 年代後半にかけて花開いたとされるモダニティーに関する研究が盛んで、研究成果が多く発表されている⁹。1920 年代から 30 年代のこの時期は、繊維工業などの軽工業を軸に重工業も大きく発展

9 阪神間モダニズムに関する研究としては「阪神間モダニズム」展実行委員会編著『阪神間モダニズム：六甲山麓に花開いた文化、明治末期－昭和 15 年の軌跡』、竹村民郎、鈴木貞美編『関西モダニズム再考』、橋爪紳也著『京阪神モダン生活』、同著『モダン都市の誕生：大阪の街・東京の街』などがある。

を遂げた時代であり、神戸・大阪間は非常に栄えた。神戸港からの輸出量は日本一で、大阪は「東洋のマンチェスター」とたとえられ、繊維製品輸出市場拡大を英国と激しく競った時代である。阪神間には新しい住宅街が開発され、富裕な中流層を中心として文化的活動が非常に活発であった。この時期を研究する研究者は、建築、音楽、芸術やライフスタイルに西洋の影響が非常に大きかったと指摘するが、前述の杉原の研究は、このような経済発展の底辺を支えたのは朝鮮や沖縄からの労働者であったと指摘している [杉原 1998: 225]。さらに視点を変えてみると、豊かな阪神間の上・中流層の人々と定住西洋人たちはいろいろな交流をしていたはずだと考えられる。大阪に住み工場労働に従事した朝鮮や沖縄から来た労働者と、神戸の北野や塩屋に住み貿易業に従事した西洋人たちは、実際に一度も顔を合わせたことはなかったであろうが、ある特定の場と時期をとらえることで、いろいろな外国人がどのような生き方をし、どのように日本とかかわったかをより深く考察できるのではなかろうか。これを今後の研究課題として発展させていきたいと考えている。

参考文献

- Collins, C. 2001, *Guide to the Papers of Harold S. Williams in the National Library of Australia*. Canberra.
- Edbury, S. 2008, *The Many Lives of Kenneth Myer*. Carlton, Victoria.
- Tamura, K. 2005 “Mary Kawatani Kirby: A Woman of Two Worlds”. *National Library of Australia News*, 55 (7), 18-20.
- Tamura, K. 2007a, *Forever Foreign: Expatriate Lives in Historical Kobe*. Canberra.
- Tamura, K. 2007b, “Harold S. Williams and his Japan”. In *Unexpected Encounters: Neglected Histories behind the Australia-Japan Relationship*. Victoria.
- Williams, H. S. 1958, *Tales of Foreign Settlements in Japan*, Tokyo.
- Williams, H. S. 1959, *Shades of the Past or Indiscreet Tales of Japan*, Tokyo.
- Williams, H. S. 1963, *Foreigners in Mikado Land*, Tokyo.
- Williams, H. S. 1975, *The Kobe Club*, Kobe.
- Williams, H. S. 1979, “Rejected by Peers, Kirbys Help Start Iron, Shipbuilding Industries” *The Japan Times*, 25 March.

- 千田武志 2004 「官営軍需工場の技術移転に果たした外国人経営企業の役割－神戸鉄工所、小野浜造船所を例として－」『政治経済史学』458, 1-34.
- 「阪神間モダニズム」展実行委員会編 1997 『阪神間モダニズム:六甲山麓に花開いた文化、明治末期－昭和15年の軌跡』淡交社.
- 橋爪紳也 2007 『京阪神モダン生活』創元社.
- 橋爪紳也 2003 『モダン都市の誕生:大阪の街・東京の街』吉川弘文館.
- 小松益喜 1979 『小松益喜素描集:戦前・後の神戸異人館』神戸新聞出版センター.
- 杉原達 1998 『越境する民:近代大阪の朝鮮人史研究』新幹社.
- 洲脇一郎 1998 「外国人と土地所有権」『神戸市立博物館研究紀要』14, 1-28.
- 竹村民郎、鈴木貞美編 2008 『関西モダニズム再考』思文閣出版.

(オーストラリア国立大学太平洋アジア研究所)